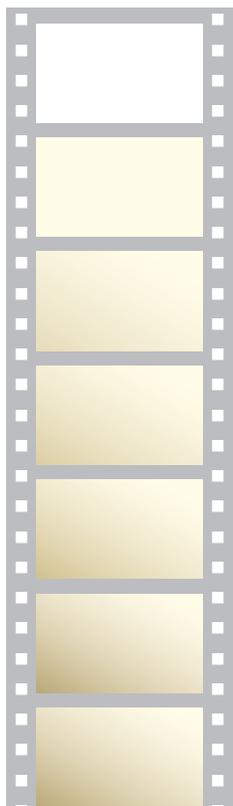


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第十二回 「君の名は？」 「知らない？」

この世に生まれて「初めて出会った映画は何だろう？」と記憶をたどってみましたが、なかなか特定できないものです。

幼少の頃、一人で映画館へは行きませんし、連れてつてくれる人は、父か母しかいません。その父は平成8年、80才で、母も平成21年、85才である世へ旅立ってしまいました。いまとなつては、確認する人もいないので、自分の頭の中の記憶装置を起動させ、思い出しながら話しましょう。

ぼくが生まれた40年代（昭和20年代）は、映画は「娯楽の王様」。作品は週替わりで上映されてきました。人気のあつた作品はラジオドラマの映画化です。「時代劇は東映」というキャッチコピーがあつたように、二本立ての時代劇が上映され、クライマックスになると、「次週をお楽しみに！」で終わるパターンでした。なかでも「新諸国物語」から「笛吹童子三部作」（54年製作）、「紅孔雀五部作」（54年～55年製作）、「七つの誓い三部作」（56年～57年製作）など、お子様向時代劇がヒットし、

ヒットした映画の中の登場人物が独立して一本の映画の主人公になるなど、上映プログラムは増えていきました。

小学校に入学する前までぼくは北海道（函館と小樽）に住んでいたもので、上映作品を劇場（建物）で思い出しています。そう言えば、ウォルト・ディズニーの漫画映画（当時はアニメとは言わなかった）は、小学校時代（愛知県豊橋市に居住）の団体鑑賞で観ました。「ピノキオ」（40年製作）、「白雪姫」（37年製作）、「バンビ」（42年製作）、「こぐま物語」（47年製作）、「ダンボ」（41年製作）などの長編漫画映画に、ミッキー・マウスの短篇漫画映画を同時上映してくれるのが楽しみでした。ほかに、ドキュメンタリー映画「砂漠は生きている」（54年製作）、「百獣の王ライオン」（56年製作）を、また邦画（日本映画）では、山本嘉次郎監督の「綴方教室」（38年製作）、山本薩夫監督の「荷車の歌」（59年製作）、今村昌平監督の「にあんちゃん」（59年製作）などを観ました。

いろいろなタイトルの映画が出てきましたが、これらの作品は小学校時代に観たもので、幼稚園時代（小樽市在住）、母と観た忘れられない二本の作品を思い出しま

した。二本とも邦画です。

一本は松竹映画「君の名は三部作」（53年〜54年製作）。ラジオドラマの映画化ですが、ラジオでは52年（昭和27年）4月から三年間放送され、放送時間になると番組を聞くため「銭湯の女湯が空になる」と言われるほどの人気で、ラジオ放送中の53年（昭和28年）第一部が映画化され、第二部、第三部も大ヒットしました。三部作合わせての上映時間は6時間12分、総集篇でも3時間の大河メロドラマでした。

物語は、昭和20年5月24日、東京大空襲の夜、東京の有楽町にある数寄屋橋の上でお互いに命を助け合った男女が、「もしも生きていたら半年後の11月24日夜8時に、この橋の上で再会しよう」と約束しますが、運命のすれ違いで、何度も約束を果たせないというドラマです。韓国ドラマでは「冬のソナタ」、洋画（外国映画）では、「哀愁」（40年製作・マーヴイン・ルロイ監督、ヴィヴィアン・リー、ロバート・テイラー出演）に似ているストーリーです。

「君の名は」で、ぼくが記憶にあるのは第二部。舞台は東京から北海道へ移ります。そこで出演するアイヌの娘役の女性に強い個性があり、そのシーンが目に残る

ついているのです。調べてみると、その娘役は、何と、石原裕次郎の奥様、北原三枝だったのです。5才のぼくには、物語はよくわかりませんが、北原三枝だけは、強烈な印象を残したのです。

(続)

(文中・敬称略)

伸

平成23年2月